

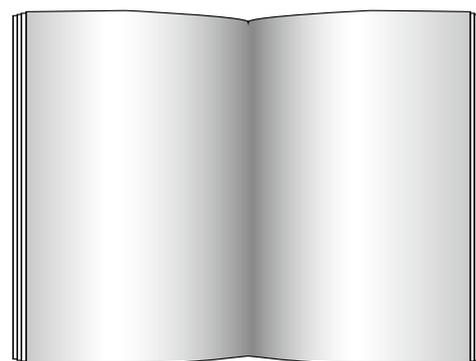
令和4年度 読書感想文コンクール 入賞者紹介～中学生・高校生～

		最優秀賞	優秀賞	佳作
中学校	1年	會田 一華 『復讐プランナー』 を読んで	上葛 友聖 『おとなになるのび太たちへ』	井川 和音 聖域を読んで
	2年	松浦 健太 『夜が明ける』 を読んで	伊藤 權 『夢』	前田 ころ 『禎子の千羽鶴』 を読んで
	3年	井川 未羽 『同士少女よ、敵を撃て』	五十嵐 明日華 『本当の正義』	佐々木 爽汰 『オルタネート』
高校		渡邊 彩貴 (3年) 戦争のない未来を創るため	川添 悠加 (2年) 『家族、捨ててもいいですか?』を読んで	目黒 好香 (1年) 鈍感に生きる

わたしがこの本を選んだ理由は、以前に読んだとき面白かったからです。登場人物たちとの年代も私と近かったし、すごく親近感がわきました。話は、主人公の深沢雄哉(中学一年生)が同級生の久利谷たちにいじめられているところから始まります。雄哉が遂方に暮れる中現れた三年生、山田さんの助言をもとに友人の眞野章司と復讐計画をすす

『復讐プランナー』
を読んで

月形中学校1年
會田 一華



めていく、というような話です。

心に残ったこと、感じたことは、四つあります。

一つ目の心に残った場面は、久利谷たちが眞野章司をいじめているところを主人公が止めに行こうとした場面です。怖がっていたけど行こうと決めたときの表現がすごく好きです。怖がっている表現も、鼓膜が内側から押し上げられる、口の中が急速に乾いていく、とかその場面の緊張感がひしひしと伝わってきてこちらまで震え上がってしまいます。

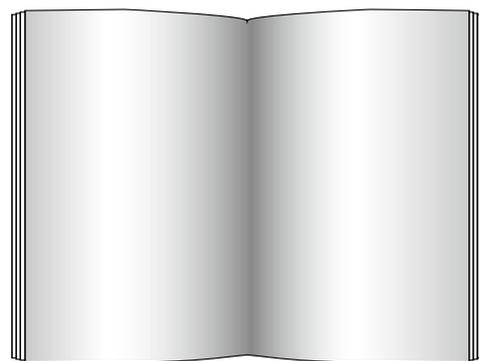
二つ目は山田さんが復讐ノートのことを提案したときです。初めて読んだときは復讐ノートという初めて聞く単語にすごくわくわくしました。確かに考えていることとかを紙に書くこととスッキリするよなあと感じました。

三つ目は場面というか、思ったことです。山田さんのキャラクターがいいな、と思いました。冷静な山田さんがいると、主人公たちも冷静になっていくので立ち位置とも

すごくあっていると思いません。山田さんの性格ならじめとかそういうものには面倒くさがって近寄らないと思つたのに、なぜそんなに手をかしてくれるのかずつと不思議に思っていました。私は、山田さんが昔いじめで助けられなかつたことがあつて手をかしているんだと思ひました。実際は少し違つていて、いじめられていたのは山田さんで復讐ノートも先輩から先輩へ、と引き継がれたものでした。山田さんにもいじめられて絶望したり、怒りに飲み込まれたりしたのかと驚きました。人つていろんな面を持つていてすごい、と思いました。

四つめは、物語の最後のシーンです。最後は復讐計画は実行せず、主人公がみんないろいろ、それぞれいろんな面があるということと自分は独りではないということに気づいて終わります。初めて読んだときは不十分だと思ひました。なぜなら、復讐計画も実行していないし、いじめも終わつたわけじゃない。結局は何も変わっていないんじゃないかと思つたからです。けれど、今回読んで主人公たちは大いに変つたのだと、気づきました。今の主人公たちならば、久利谷たちからのいじめもなんとかなつちやいな気さえます。

この本を読んで、少し考えました。いじめはなくなりほしくないと思ひます。学校は他者と、考えを深めたり関わるためにあると思うからです。でも心の負担を減らす事はできるかもしれない、いじめによる自殺者は減らせるかもしれないと思ひます。復讐プランナーみたいなどころがあつたらすごく面白いな、と思ひます。いじめの対処法、復讐方法。綺麗事で片付けるわけじゃなくて、復讐計画を、冷静に練る。すごく面白いです。こういう、独りじゃないんだと教えてくれるような隠し扉の逃げ道があつたらいいな、とそんなことを考えました。



『夜が明ける』

を読んで

月形中学校2年

松浦 健太

私がこの本を選んだ理由は、表紙の絵に心を惹かれたからだ。この本の表紙には、

異形の男、アキの顔が表紙全体に描かれている。大きく口を開けて歯を食いしばっているその姿は、なにかに耐えているように私には見えた。

私がこの本を読んで印象に残つた場面は二つある。一つ目は、当時十六歳の「俺」が事故で父親を亡くし、父親が

作つた一〇〇万円近くの借金を背負うことになつた場面だ。この場面を読んだとき、私はもし「俺」と同じ立場に立たされたら自分にはどんな事ができるだろうと思つた。まず、普段なんの不自由もなく暮らしている私には、自分に起こつてくる出来事がどれくらい自分の未来に影響するかがわからないと思う。今までの日常が変わらずに続いていくと思うのかもしれない。だけど、実際は学校に通うことも難しくなるし、自分がほしいと思つたものも買えなくなるだろう。「お金がない」ということは、自分がこれまで当たり前だと思つてきた生活を簡単に奪つていくんだと思つた。

二つ目は、「俺」の同級生であるアキと母親の関係だ。アキは小さな集落で母親が十九歳のときに生まれ、父親はアキが生まれる前に姿をくらました。私は、母親がアキの人生に大きく影響したと思う。母親はもともと気が弱く、うつ病を患つていた。そんな彼女はアキを愛でる事もあつ

たが、アキが大きくなるにつれて彼に虐待を繰り返すようになった。しかし、気が弱いアキは成長して母親より力が強くなつても逆らうことができなかったのだ。やろうと思えば、彼女を殺すことすらできたのに。アキは周囲に助けを求めることを知らなかつたし、アキに救いの手を差し伸べる人々も少なかつた。母親に頼つて生きていくしかない幼い子供に、洗脳に近い虐待を加え、その子の自由を奪うというのはあまりにも残酷だと思つた。そして、小さい頃

READING BOOK



に植え付けられた恐ろしい記憶は、その人の頭に残り続けるのかなと思った。

二人の人生を見て、私は「貧困」というものがどんなものなのか自分なりに考えた。それは、自分の好きなこと、したいことを自由に選べないこと、生まれた環境や自分の体質、周囲の人々の影響など自分ではどうしようもないものに阻まれて、「自分らしく生きること」ができない、ということではないだろうか。二人はどんなに苦しくても、明日を信じて必死に生き続けることしかできなかった。私は今、「宇宙開発に携わる仕事を

をする」という夢を持ち、その夢に向かって一生懸命努力している。それは、私の周りの環境が恵まれていて、周囲の人々も応援してくれているからできることだ。しかし、自分の好きなこと、したいことがあっても生きることができない、一杯で夢を見ることができない、それを目指すことができない人々が世界にはたくさんいるんだと思う。だから、私は周囲に自分がしたいことを

自由に選べる環境があるにも関わらず、好きなことがない、将来の夢がない、と言っている人たちを見かけたとき、それはとてももったいないことを言っているなと思った。

この本を読んで、私が強く共感した言葉は「人には困ったときにあらゆる人に助けて貰う権利がある」「助けてもらうことは負けじゃなくて当然のこと」という言葉だ。大人になってテレビ局に就職した「俺」は、過重労働を強いられても決して助けを求めず、結果的に自分の体を壊し

てしまった。その時の「俺」はまだ、「誰かに助けてもらうこと」が負けだと思いでいた。あるいは、助けてもらうことが頭になかったのかもしれない。そうなる前に誰かに助けを求めていれば、「俺」がリストカットを繰り返し、一日中ゴミ屋敷で生活する日々を送ることにはならなかったと私は思う。

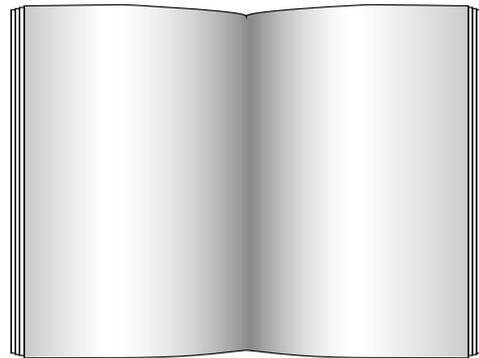
私はこの言葉に加えて「自分から困っている人に手を差し伸べる」ことが大切だと思った。幼くして亡くなってしまふ子どもたちや、幼い頃に虐待を受け、心に傷を負ってしまった子どもたちなど、自分から助けを求めることができない人々にも、我々は目を向けなければいけないと思う。普段の生活の中で、募金をするだけで救われる人々がいるかもしれない。友達と何気ない会話をするだけで、自殺を食い止めることができるかもしれない。小さな積み重ねを繰り返して、世界中の人々が平和に暮らしていけるようにすることが、未来の私たちの課題のひとつなのだ。



『同士少女よ、敵を撃て』

月形中学校3年

井川 未羽



私がこの本を手にとった理由は、この本の裏に書かれた理解できそうでできない一つのフレーズに妙に興味を湧いたからだ。「戦争は女の顔はもちろんのこと、男を含めたあらゆる性別の顔もしておらず、つまり人間の顔もしていないのだ」とそこには書かれていた。わかるようなわからないような。戦争というものには、私にしては程遠いものだという認識が最近になって覆りつつあることから更にこの本に興味を湧いた。

二〇二二年。私は、ペンを持って「勉強」という敵に立ち向かっている。では、一九四二年、モスクワに住む少女はどうだろうか。私と同じような敵と向き合っていたのだろうか。いや、それは違っていた。ではその少女は何を持って、何に立ち向かっているのだろうか。私が立ち向かっているのは本当に「敵」と呼んで良いのか。この本を読んで私はそう思った。

この本は独ソ戦争が激化する一九四二年、モスクワ近郊の農村に住む少女の日常が一瞬にして奪われるところから始まる。昨日と変わることない今日。急襲したドイツ軍によって彼女の母親や村人までもが惨殺された。自らもドイツ軍に射殺される寸前、ある兵士が彼女を救ったのだ。それは赤軍の女性兵士だった。生きる意味を失った彼女にかけられた言葉は残酷だった。「戦いたいのか、死にたいのか」そしてこの言葉から彼女は「銃」を手に狙撃兵として「敵」

に銃口を向ける。という日常が始まる。

私は耐えられなかった。少し時代が違っただけなのに、少し住んでいる場所が違うだけなのに、どうしてこんなに目指しているものが違うのか、失ったもの、手にしたものの、何もかも全てが違いすぎる。自分が小さく感じた。それと同時に今いる日本からたったの八〇〇Kmしか離れていない土地で同じような人々がいると考えると、止むことのない雨を眺めているようななんとも言えない気持ちになる。ふと絶対に言っているいけない、「可哀想」という言葉が頭にちらつく。彼女たちはそんな言葉を望んではいない。わかっているはずなのに……と私は思った。



彼女が狙撃兵として前線で戦うところはいくつかの視点によって描かれる。母親、仲間を失った彼女にとつての「敵とその地の風景」違う事情を抱えた仲間にとつての、銃が向けられている相手にとつての「敵とその地の風景」すべての視点においてもきれいな水や町並み、人々の暖かさは描かれていなかった。すべての表現が色あせていた。それに気づいた頃にはもうこの本での戦争は終わりを告げていた。人々の、自然の、人間の美しさが感じられない、そういう話なのだ。私は何一つわかっていなかった。何が「可哀想」だ。彼女はそんな話の次元にはいなかったのだ。怒り、復讐しかない兵士たちは「美しさ」が見えなくなっている。確かに戦争は人間の顔をしていなかった。それをここまで理解したときには私の心は穴が空いていたところではなく、半分はなくなっていただろうか。改めて私は幸せだと感じた。感じられずにはいられなかった。

戦争はいかなる理由があつ

てもあつてはならない。そう口で言うのは簡単だ。実際に同じ年齢の子が銃を持って、感情を失って戦っていることがどれほど異常なことか、完全には言えないがわかった気がした。彼女たちは愛する人のため、おかしな国のために戦った。では今の私には何ができるのだろうか。今、手にしているペンで誰かを救うことはできるか、考えてみようか。戦争はあつてはならない。そう考える人々に問うてみよう。あなたには何ができる。口だけにならないように。



戦争のない未来を

創るため

月形高校3年
渡邊 彩貴

「馬鹿者！あの遺書が特攻隊員の本心だと思ふのか。」これは元日本海軍中尉の武田貴則さんとある新聞記者との会話の一部分です。元特攻隊員である武田さんが、特攻へ行く隊員が家族に宛てた最後の手紙に対して、記者の、特攻とはテロリズムであり手紙にも喜んでいと書いてあるという発言に怒りを表しているシーンになります。この一文に特攻の悲惨さを強く感じま

した。

いま紹介した本は百田尚樹の著書、「永遠の0」です。今回この本を選んだわけは、戦争とは私たちの身近に存在する怖さであることを知りたかったからです。今年に入りウクライナでの戦闘が発生し、今もなお続いています。さらにミャンマーでの軍事クーデターや台湾情勢など日本周辺でも軍事活動が活発化しています。いまこそ私は戦争のない未来をこの読書感想文を通して訴えたいです。

まず「永遠の0」とは、司法試験に落ち進路に迷う青年がある日、血縁上の祖父が別にいるのを知ることから始まります。実の祖父は戦時中に零式艦上戦闘機、ゼロ戦の搭乗員として戦い、終戦直前に特攻に出撃し、戦死しています。そこで祖父がなぜ特攻に志願したのかを調べ、やがて祖父の最期を知る人物たちにとどり着く話になります。

この本を読み筆者が何を伝えたかったのかについて読み解いてみました。そして読んでいく中で考えさせられる場

面が三つあり、それぞれを紹介していきます。

一つ目は冒頭にもあった元特攻隊員と記者との会話です。私はとらえ方や人の考えによって物事の意味が変わるのだと思いました。戦争の体験のない記者はテロととらえました。人々や街を攻撃する船に決死の体当たりをする特攻隊員は、実は家族や愛する者のために涙を堪えて国を守ろうとしていたのです。私はどちらとも賛成できませんが、調べてみると私と同じ一七歳の搭乗員が沖繩の空で命を落としているのを知りました。戦争で死ぬのはいつも若者であり、今のロシア、ウクライナ双方とも若者が戦地へ行き、故郷で帰りを待つ両親がいるのです。改めて平和の尊さ、特攻への認識の違いを痛感しました。

二つ目は戦時中の思想を現代人である記者が「あれは洗脳だった。」と話す場面です。「特攻は洗脳か」は、読者に対する問題提起だと考えました。でもそれは、果たしてあの時代だけでしょうか。

今の時代、特攻志願のような個人の選択の余地のない集団意識はありません。しかし私たちは毎日同じ時間に、同じような服を着て、学校や会社に行つて、みんな同じような生活をしています。これは集団意識とは言わないでしょうか。そして私たちは無意識にこれらのことをしているのです。時代によって集団意識や価値観は変わります。戦争や特攻などを見て今の時代でよかったですという人が多いと思います。ということは今の時代も未来の人々がコロナ対策や環境破壊をみて同じことを言うかもしれない。私たちはコロナウイルスの脅威と共に精一杯生きています。戦時中の人々もそうだったのです。今も昔もその時代の集団意識にまみれながら、それが正解と思いつまみながら生きていくのです。そこから後世の人にも誇れる未来をつくりたい、残していきたいです。

三つ目は主人公の祖父とラバウルで共に戦った元海軍上等飛行曹、景浦介山さんの放った一言です。「特攻作戦

は十死零生。」これは特攻が成功するとは死、失敗とは墜死を意味しています。彼はかつて敵機を撃ち落とすことに快感を覚え、自分の腕に酔う戦闘員でしたが、特攻という異常な考えに疑問を持ち、現代においてはつきりと主人公に言い切りました。当時から組織的に行われていた特攻に反対の意見の人が多くいたと私が調べた際に知り、記者の言う洗脳ではなかったのだと思いました。

この本を読み終え、自分の身のまわりにも多くの戦争経験者がいるのではないかと思えました。実際母方の祖母の兄弟が戦死しています。先日部活帰りがある蕎麦屋に立ち寄ると満洲へ行きソ連により抑留されたもと陸軍の方がいらつしゃいました。九〇代で車を運転なさるお元氣な方でした。テレビやSNSなどでは知ることのできない生の声を聞くことができ、とても貴重な体験をさせていただきました。年々少なくなる戦争体験者の話を聞き記すことで時代というバトンを後世へ繋ぐことこそ筆者が本当に伝えたいことだと思えました。決して戦争万歳や零戦万歳というメッセージを込めるためではありません。戦争から現代、そして未来へのつながりを書いた本こそ「永遠の0」なのではないでしょうか。先人から繋いだバトンを次の時代に繋ぐために、私は今の時代を精一杯生きていきたいです。それが「戦争のない未来を創るため」への第一歩だと思います。

